

西田哲学会会報

第十五号

題字 上田閑照

発行・西田哲学会

〒九二九-1126

石川県かほく市内日角井一番地

石川県西田幾多郎記念哲学館内

電話〇七六-二八三六六〇〇

西田哲学会第十五回年次大会報告

白井雅人

西田哲学会第十五回年次大会が、平成二十九年七月十五日(土)、十六日(日)、十七日(月)の三日間、西田幾多郎の生まれ故郷である石川県かほく市の石川県西田幾多郎記念哲学館において開催された。

初日の午前中は『善の研究』講読会と研究発表が行われた。『善の研究』講読会は松本直樹氏と太田裕信氏が担当し、『善の研究』第二編第四章の講読を行い、参加者とともに親密にテキストを読解した。研究発表では、高橋勝幸氏(南山宗敎文化研究所)による「中動態の文法について——西田哲学理解の道筋」、末村正代氏(関西大学)による「鈴木大拙の月号観——一遍から妙好人へ」、山内翔太

氏(京都大学)による「西田哲学における情意とその表現——フランススピリチュアリズムとの比較から」と題された発表が行われた。高橋氏は國分功一郎氏の『中動態の世界』をヒントにして、西田哲学を中動態の論理として理解することができるとはならないかという問題提起を行った。末村氏は、鈴木大拙の浄土思想や名号についての理解を年代順に見ていきながら、その深まりを丁寧に跡付けた。山内氏は『意識の問題』、『藝術と道徳』、『一般者の自覚的体系』などの西田の著書とベルクソンの思想を対比させながら、その共通点と差異を明らかにした。

同日午後には、浅見洋氏(石川県西田幾多郎記念哲学館)による「現代看護学と西田哲学の接点——終末論的思惟」と竹内整一氏(鎌倉女子大学)による「哲学の理由(わけ)——西田幾多郎・「かなしみ」の哲学」と題された講演が行われた。浅見氏はまず、エンドオブライフケアを紹介した。エンドオブライフケアは、癌や高齢者に偏ったものとして理解されがちなたーミナルケアとは異なり、診断名や年齢にかかわらず生が終わる時まで最善の生を生きることでできるように支援するものである。このエンドオブライフケアの理念に基づき、ドイツの子供ホスピスの現状が紹介された。そして、西田の死生観が問題にされ、西田の終末論的な思惟と看護学の接点が論じられ

た。竹内氏の講演は、西田の『国文学史講話』の序』を国木田独



歩や綱島梁川を補助線にしなが
ら読み解くものであった。西田
が人生の悲哀を重視していたの
はよく知られているが、「悲し」
は動詞「カネ」と同根であると
考えられており、「ししかねる」
という語に連なるものである。
それは自己の有限性や無力さを



感じているということの意味する。しかしそこでは同時に、大きな不可思議の力とつながるということがあり得る。このことが西田自身の言葉や、国木田、網島の言葉を通じて明らかにされた。そしてそれは仏教の悲願に通じるのではないかと示唆された。

二日目の午前は、二会場に分かれて研究発表が行われた。四階会議室では大角康氏（京都大学）による「統一的直覚——純粹経験の彼方としてのその根柢」と城阪真治氏（関西学院大学）による「中期西田哲学における意志と行為の問題」という二つの発表が行われた。大角氏

の発表は、純粹経験のさらなる基盤として統一的直覚・絶対的な統一作用を考えようとするものであった。城阪氏は、西田の論文「叡智的世界」に定位しながら意志の位置づけを探り、意志に基づく行為の意義を明らかにした。

哲学ホールでは、服部圭祐氏（京都大学）による「京都学派における哲学の現代性——三木清の「人間学的存在論」と戸坂潤の「イデオロギー論」、森野雄介氏（大阪大学）による『自覚における直観と反省』における瞬間の身分」、内藤希氏（一橋大学）による「田辺哲学における質料概念の形成——西田哲学における場所論との関係から」、佐野之人氏（山口大学）による「何故西田は『善の研究』において道徳から宗教への移行を語らなかつたのか」という発表が行われた。服部氏は三木や戸坂の哲学が「理論と実践との弁証法的統一」を目指したものであるとし、そのような営みが常に「現代的」な課題であることを論じた。内藤氏は田辺元

による西田批判の重要な論点の

一つであった個別的意識の成立の問題を論じ、田辺が質料概念の検討を通じてその問題の解決の端緒を得たことを明らかにした。森野氏は、西田の瞬間論の成立の端緒にヘルマン・コーエン読解があつたことを論じ、この時期の瞬間論が西田の『無の自覚的限定』期の時間論に繋がらないか」と問題提起した。佐野氏は『善の研究』第三編「善」と第四編「宗教」の間に断絶を見出し、それは道徳から宗教へと自然に移行する立場を否定するためであつたのではないかと論じた。

研究発表終了後、遊佐道子氏（西ワシントン大学）による『日本哲学』がなぜ可能なのか・西田幾多郎との《対話》より」と題された特別発表がなされた。北アメリカで「日本哲学」がどのように理解されているのかという点から説き起こし、西田哲学が日本文化に根差したものでありながら、同時に文化の枠組みを超えるものであることが論じられた。遊佐氏の北アメリカでの経験に裏付けられた豊かな内容をもつ発表であつた。

内容をもつ発表であつた。

昼食休憩を挟んで総会が行われ、林永強氏（獨協大学）による『Tetsugaku Companions to Japanese Philosophy』の紹介がなされた。その後、短い休憩を挟み、シンポジウム「西田哲学とフランス哲学」が上原麻有子氏（京都大学）の司会のもと開催された。提題は杉村靖彦氏（京都大学）の「自覚」する身体——西田のメーヌ・ド・ピラ評価から見えてくるもの」と合田正人氏（明治大学）の「西田幾多郎と「模倣」の問題——タルドへの小さな言及の波紋」であつた。シンポジウムの詳細はシンポジウム報告をご参照いただきたい。

三日目は国際シンポジウムが開催された。詳細は国際シンポジウム報告に譲りたいが、ブラジル、ドイツ、イタリア、オーストリアから招かれた研究者による、国際色豊かなシンポジウムであつた。

多くの来場者に恵まれ質疑も活発に行われた大会であつた。暑い中足を運んで下さった皆様に深く感謝申し上げますとともに、大会を支えて下さった石

川県西田幾多郎記念哲学館のス
タッフの皆様にも厚く御礼申し

上げた。

シンポジウム報告

西田哲学とフランス哲学

上原麻有子

第十五回年次大会のシンポジ
ウム「西田哲学とフランス哲学」
は、七月十六日十四時二十分
から二時間四十分にかけて開催
された。今回は、提題者とフロア
との対話が一層充実することを

が見出した自らの「自覚」とビ
ランの「内奥感(sens intime)」
の共通性に着目し、しかしそれ
が分岐して「自覚的体系」が「身
体的に再構成」される過程を丁
寧に考察している。

目指し、時間配分に余裕をもた
せるよう工夫がなされた。提題
は従来の三つから二つに変更。
フランス哲学界の第一線で活躍
する、杉村靖彦氏(京都大学)
と合田正人氏(明治大学)が登
壇された。両氏いずれも、西田
の思索の内部にフランス哲学と
の結節点を探り、そこから西田
哲学研究を新しい方向へ導くと
いう独自の巧みな論を展開され
た。

西田哲学のこの「転回」は、
「一般者の自覚的体系」(一九二
九)から「無の自覚的限定」(一
九三二)にかけて見られる。ま
ず「自覚」の特徴は、「働くこ
と自体の知」として深化され、
「行為的」自己から「叡智的」
自己へ」と向かう「脱体的」身
体性と「脱歴史」性に現われる
のだが、一九三〇年代の「自覚」
は、根底に「純身体」と「原歴史」
を位置づけることで、練り直さ
れる。ピランの「内奥感の原初
的事実」において、身体と作用
は不可分であり「直接的に統覚」
されるが、「自らの動きをその

場で直接感知する場面におい
て、自己と自己身体は「、やは
り「区別される」ものとして捉
えられている。このピランの「一
体性」に対して、西田が求めた
「真の二元性」とは、身体の動
きをも含む「全実在の動態」が、
「その事実性においてしかるべ
き区別の下で知られうる」とい
うことであつた。このように西
田は、「内奥感の原初的事実」、
つまり「無媒介的」に知られる
身体の動きとしての「内的事実」
と物の動きとしての「外的事実」
のいずれにも「通底する一体的
な動き」へと、ピラニズムを掘
り下げながら、乗り越えたのだ。
それは「事実が事実自身を限
定する」という「事」、あるいは
「世界」の「出来」としての
事実であり、しかも一瞬ごとに
自己矛盾を含みつつ「生起」し、
「更新」される。長めの結論で、
杉村氏は、「ルサンチマンの哲
学」のポテンシャルを受け継い
だ現代フランス哲学」と西田哲
学との間に想定される「論争」
の意義を力説し、一例としてレ
ヴィナスの「古い」る「身体」
を取り上げた。以上が発表の論

旨である。

後半の提題は、合田氏による
「西田幾多郎と「模倣」の問
題——タルドへの小さな言及の
波紋」であつた。フランスの社
会学者、ガブリエル・タルドの
思想は、先行研究において、お
そらく西田哲学と突き合わせ本
格的に論じられたことはない。

合田氏の着眼点は、タルドと
デュルケムとの「模倣」概念を
めぐる論争にある。デュルケム
の「社会種」に自らの「種」を
重ね合わせた田辺元、タルドの
「模倣」の深い意義を理解して
いた西田、この両者の哲学の比
較研究に対して、タルド・デュ
ルケムの論争は「本質的な論点



を提示」するのだという見地から、西田によるタルドの読みを検討する。これが発表の枠組みであった。

まずその論争の概要が、かなりの力を籠めて示されたが、ここでは、タルドのデュルクム批判は、「社会的事実」は「その個人的現出の外部に実在している」とする点にのみ言及しておく。タルドはむしろ、民族のよ

うな「全体的な諸現象」ではなく「諸個人」の「独自性」こそが「実在」だという立場に立つ。西田はタルドの「無限」なる「開いたモノド」という考えに賛同し、そこにモノド間の無限の相互作用としての「極微知覚」を関連づけた。合田氏は、「極微」には「一般者を内包した」特殊としての「一般者の自己限定」の「表出」があることを指摘している。そしてさらに、「極微」や「表出」の問題は、「共同的意識」と「個人的意識」との實在的同一性という論点へと向けられる。タルドの「模倣」はこの「共同意識」を基礎としてもつのだが、合田氏はこれを、西田の「自己の中に自己」を写す

という自覚」の無限の過程という観点から捉えている。「自覚」は、タルドの思想を特徴づける「模倣」「類似」「差異化」と親和性がある。この意味で、西田はタルドのこのような「模倣」の含意を「世界で最も早く直観した哲学者であった」。合田氏はこのように強調し締めくくった。

発表に続く休憩後、質疑応答に移る。五十分ほどの充実した対話の時間が流れた。西田哲学のベテラン研究者から差し出された熟慮の質問やコメントに対し、両氏は、改めて独自の主張にもとづきそれに応じた。問いの中心は、「自他の区別、連続／非連続の動性」、「事実の自己限定と二元性」、「叡知的自己に對して出される身体」、「西田哲学の現代的意義」、「タルドの『社会』概念の歴史性」に関するものであった。

【報告】国際哲学交流シンポジウム

「西田哲学——間文化の視点で」(Nishida's Thought in the Perspective of Intercultural Philosophy)

大橋 良介

「国際哲学交流シンポジウム」は、歴史を辿るなら、ハイデッガーの故郷・メスキルヒ市と西田の故郷・宇ノ気町とが一九八五年に交流協定を結んだことを受けて、双方の町／市が交互に行う企画として始まった。第一回は一九九一年だった。その後、宇ノ気町は市町村合併でかほく市へと発展的に解消し、また「西田哲学館」が竣

工したので、シンポジウムは西田哲学館で行われるようになった。また「西田哲学会」年次大会が三年毎に「西田哲学館」で行われるようになったので、二〇一四年度からは「西田哲学会との共催」という形で、学会の年次大会の三日目に行われるようになった。「メスキルヒ市・かほく市の交流事業の一環」として、かほく市が財政的に負担



する「西田哲学館」の事業であるが、「西田哲学会」年次大会のプログラムにも属することになったのだ。

今回の講演者たちはブラジル、ドイツ、イタリア、オーストリアから招かれており、いずれも、西洋哲学研究のなかで日本哲学をも視座に据える学者と

して知られている。発表順に名前を挙げよう。

1 アントニオ・フロレンティノー (Prof. Dr. Antonio Nieto Florentino) / ブラジルのカンピナス大学。演題「ブラジルにおける京都学派の哲学の受容」(Die Rezeption der Philosophie der Kyoto

Schule in Brasilien)

2 モニカ・キルロスカー

ル・シユタインバツハ
(Dr. Monika Kirloskar-Steinbach) ドイツ・コンス

タンツ大学。演題「間文化
哲学の理念——われわれは
西田幾多郎から何を学ぶこ
とができるか？」(Die Idee

Interkultureller Philosophie:
Was können wir von Nishida
Kiraro lernen?)

3 マルチェッロ・ギラルディ

(Dr. Marcello Ghilardi) イ
タリア・パドヴァ大学。演
題「混信の痕跡——西田哲
学の間文化的側面」(Traces
of Interference: intercultural
aspects in Nishida's
Thought)

4 ゲオルク・シユテンガー

(Prof. Dr. Georg Stenger) オーストリア・ウィーン大
学。「世界から考える——間
文化哲学と現象学にとって
の、西田の重要性」(“Von
der Welt her denken”——
Nishidas Relevanz für die
Interkulturelle Philosophie
und Phänomenologie)

司会および通訳は、私・大橋
が務めた。

第一講演者のフロレンティー
ノ教授は、「ブラジル西田哲学
会」を昨年に立ち上げて、初代
の会長を務めている。出版され
たばかりの『善の研究』のポル
トガル語版が披露されたので、
聴講者たちも大いに関心を唆ら
れた。

第二講演者のキルロスカー
ル・シユタインバツハ博士は、西
田哲学についての的確な要約を
行った上で、西田哲学が期せず
して「間文化哲学」的な洞察を
与えることを述べた。そして日
本とインド(博士の国籍はイン
ドである)に伝わるいろいろな
「絵画」像を紹介し、日本とイ
ンドのそれぞれの「間文化」性
を、画像分析を通して考察した。
新鮮な内容であった。

第三講演者ギラルディ博士
は、「混信の痕跡」(Traces of
Interference)という独特の概
念を駆使して、これを西田哲学
の「場所」の考えを照らす解釈
学的な足がかりとすることを、
試みた。「間文化」が成立する「場
所」が常に一種の「混信の痕跡」

の場であることを論じ、意欲的
な内容だった。

最後の講演者シユテンガー教
授は、大著『間文化性の哲学』
の著者であり、現象学の第一線
の学者でもある。氏は西田の言
う「個人の自覚から世界を考え
るのではなくて、世界から考え
る」という立場が、現象学的に
も間文化的にも重要な洞察を提
示するものであることを、雄弁
に解き明かした。

それぞれに活発な質疑がなさ
れた。最後に司会・通訳の大橋
から、今後の「国際哲学交流シ
ンポジウム」に関して、問題提
起がなされた。もともと「宇ノ
気町・メスキルヒ市の姉妹交
流」という形で始まった企画な

エッセイ

往生問題と西田哲学

浄土教の最も基本的な課題で
あるはずの「往生」が、昨今改
めて問い直されている。その波
紋は、真宗教学の学界にかぎら
ず、新聞報道などによって巷に

ので、交流の仲介者でもあった
大橋が、これまで、映画で言え
ばシナリオ・ライター、監督、
出演者、道具係、連絡係を、喜
んで務めてきた。しかし、「西
田哲学会」との共催として今後

も続行するというのであれば、
実行体制の「システム化」が必
要である。人的にも(講演者た
ちとの連絡や案内)、財政的に
も(ゲストの接待を含めた諸費
用も含めて陰に陽に、かなり出
費が要る)一人の人間がボラン
ティアとして背負うには明らか
に限界がある。

この問題の検討は、西田哲学
会の理事会・幹事会に委ねられ
ることとなった。

名和達宣

も広がっている。
発端は、仏教学者の小谷信千
代氏が二〇一五年に刊行した
『真宗の往生論——親鸞は「現
世往生」を説いたか」(法蔵館)。

真宗の「近代教学」の中で共有
されている往生理解を、親鸞は
説かなかった「現世往生説」で
あると厳しく批判し、その後、
立て続けに『誤解された親鸞の
往生論』(二〇一六年)、『親鸞
の還相回向論』(二〇一七年)
を上梓している。西田哲学とは
別次元のようにも映るが、私自
身は深いところで関連している
と考える。

氏が「近代教学」を批判する
に当たり、標的に掲げるのは、
現代の真宗大谷派の教学に最も
多大な影響を及ぼすとともに、
西田幾多郎や田辺元などの哲学
者にも影響を与えた曾我量深、
ならびにその曾我を無批判に信
奉する人々である。無論、これ
までも「近代教学批判」と呼
ばれるものはあった。しかし、
従来の批判が、主に歴史的な
見地より社会性の乏しさや国家
(戦争)との関わり方を糾弾す
るものであったのに対し、今回
は教学の中心課題たる「往生」
をめぐるものであるため、事態
はより深刻である。

さて、氏が「現世往生説」と
して批判する代表例は、曾我の

「往生は心にあり」、「往生は生活である」といった言説である。これらの了解は、伝統的に「死んで浄土に生まれ変わる」として「往生」が捉えられてきたのに対し、この現世において信心を獲得するところに開かれる境涯として受けとめ直したものである。それは現在の救済を希求する中で見出された創造的な読解であり、曾我自身が「拡大解釈」と呼ぶものである。

しかし、小谷氏はそういった言説は、仏教の思想史や文献学的な考察を欠いた「誤解」であると批判し、あたかも近代になつて混入された不純物のように扱う。そして氏は、そのような近代以降に開拓された解釈を「宗教哲学的解釈」とも呼び、時には西田哲学の影響（「永遠の今」など）を指摘する。

この問題提起は、一見「往生」の解釈が争点のように思えるが、おそらく氏が究極的に批判しているのは、「近代哲学」の学問姿勢である。確かに親鸞の言葉を読解する際に、曾我の解釈を無批判に根拠として掲げたり、援用したりすべきではない

であろう。その点からすれば、氏が重々指摘するように、テキスト原典に実証的に当たる作業は必須である。しかし、同時に曾我のような人物によって開拓された視座を手がかりに、親鸞自身の言葉に立ち返り、そこから新たな創造的解釈を発掘することも可能と考える。

実のところ、私が西田哲学の世界に参入するようになったのは、西田の宗教論の視座に、親鸞の言葉をラディカルに読解するための手がかりがあると予感したためである。例えば、西田が最晩年の「場所的論理と宗教的世界観」において「平常底

「杉本耕一追悼シンポジウム」に関わって

喜多源典

平成二十九年七月二十二日

(土) 京都大学文学部校舎にて、昨年四月に逝去された故・杉本耕一氏の追悼シンポジウム「哲学」と「宗教」——杉本耕一の思索」が開催されました。本学会・会員であり、愛媛大学文学

や「一歩一歩血滴々地」という語をもつて論じる境涯は、真宗教学における「現生正定聚」に当たり、曾我が「往生の生活」や「往生の道」と言い表したものに通底すると考える。

問題の焦点は、単に言葉の用法にとどまるのか、はたまたその境涯まで包むのか。いずれにせよ、一連の問題提起によって教学の現代的課題——そこが西田哲学と交流する場所でないか——が浮き彫りになったと考える。「死後か、現世か」といった短絡的な二極化や水かけ論に堕することなく、より有益な対話の場が生まれることを期す。

部准教授であった杉本さんは、西田哲学を主として京都学派の

哲学の研究、教育において貢献されてきただけでなく、これからの西田・京都学派の哲学研究の発展において極めて重要な研究者であったと思います。それ

だけにお亡くなりになられたことは今でも残念でなりません。杉本さんはご自身の著書「西田哲学と歴史的世界——宗教の問いへ」（二〇一三年）をはじめとして多くの独創的な研究を残されています。その研究業績を踏まえ、杉本さんの遺志を受け継いでいくために、藤田正勝先生が呼びかけ人となって、杉本さんから様々に影響を受けた研究者たちが集い、本シンポジウムが開催されました。私も関西大学大学院に在籍時に非常勤講師で来られていた杉本さんに数年間ご指導して頂いた縁から、シンポジウム実行委員の一人として微力ながら関わらせて頂きました。当日は一〇〇名近くに及ぶほどの方々が参加されるという盛況で、杉本さんの人徳の高さと研究内容の有する可能性の大きさを改めて実感しました。

「哲学」と「宗教」——杉本耕一の思索」では、杉本さんと交流の深かった太田裕信氏、白井雅人氏、名和達宣氏、水野友晴氏が、それぞれに杉本さんの研究テーマを継承発展させるべく発表を行い、続いて、コメントーターとして井上克人先生、板橋勇仁先生を交えて活発な討論が行われました。

初めに、藤田先生が「開会挨拶」を述べられ、続いて、愛媛大学で杉本さんと同僚であった山本與志隆先生が「杉本先生の思い出」と題してお話しくださりました。シンポジウム「哲

学」と「宗教」の関係性という問題の大きさが改めて浮き彫りとなったように感じました。私の印象に残っているのは、杉本さんの言う「哲学」と「宗教」の関係性——西田の言う「哲学」は、すでに「宗教」の方に一歩踏み出したところまでを射程に含んだ「哲学」であったと言え——に対して、板橋先生が「哲学」の立場は「宗教」の側面まで踏み込んでいいのか？

そこで「哲学」の立場は確保されるのか？」と疑義を呈されたコメントでした。その内容は、「哲学」と「宗教」の関係性を考える際の重要な視点であると気付かされたと同時に、私は、西田の言う「哲学」は「宗教」

の側面まで踏み込んだものとして捉えたい立場であり、板橋先生のコメントは今後の私自身の研究課題としても受け止めさせて頂きました。今回のシンポジウムは、杉本さんの生前の仕事を今後私たちがどのように引き継いでいくことができるのかという、杉本さんとの対話が新たに始まる場であったように感じています。

シンポジウムの場にながら、私の脳裏には杉本さんとの様々な思い出が自ずと蘇っておりました。その中でも強く思い起こされたのは、私が博士後期課程一年目くらいの頃だったでしょう。か、ある研究会の場で杉本さんから突きつけられた言葉です。それは「逆対応とか絶対矛盾的自己同一とか、分かった気になっていて実は何も分かっていない西田哲学研究者がたくさんいます、あなたもその一人だ」という言葉でした。この言葉は、常に私に対して鋭く問いかけてくるものとして、今も鳴り響き続けています。そして私はその言葉も含め杉本さんの研究内容を批判的に問い返し続

けています。私が西田哲学研究を行っていく限り、杉本さんとの対話はこれからもずっと続いていくことでしょう。

理事会報告

平成二十九年度

第一回定時理事会

西田哲学会第十五回年次大会の開催にあわせて、平成二十九年度第一回定時理事会が、七月十五日十二時四十五分より石川県西田幾多郎記念哲学館四階会議室にて開催された。理事会に出席した理事は二十名(委任状出席六名を含む)で、幹事を兼任する理事を含めて幹事十二名も会に出席した。

●第十六回年次大会について

平成三十年七月二十一日(土)・二十二日(日)の日程で学会年次大会を関西大学千里山キャンパス(大阪府吹田市)を会場に開催することが決定された。

●秋の理事会開催について

平成二十九年十月二十九日(日)十三時から立正大学で秋の理事会を開催することが決定

された。

●事務局からの報告

(1) 平成二十八年度会計報告、平成二十九年度予算案が事務局から提示され、審議を経て、承認された。

(2) 入会希望者、退会希望者、除籍候補者が事務局から示され、審議を経て、入会、退会、除籍がそれぞれ承認された。ただし、会費未納の除籍候補者および郵便物が届かない会員のなかに知り合いがいれば連絡を入れることが確認された。

●編集委員会からの報告

(1) 『西田哲学会年報』第十四号への編集委員からの論文応募について・田中久文編集委員長から以下の報告がなされた。第十四号への論文応募が少ないことが見込まれたため各方面に投稿を促した。その結果編集委員である水野理事から自身の論文を投稿することについて照会があり、会長にも問い合わせたところ、編集委員の応募を禁ずる規定はなく、本件の扱いは編集委員

会の判断に委ねたいとの意見であった。そこで編集委員会としては、編集委員全員の了解を得て、締切期日までに応募された論文を匿名にして公平に審査することとした。その結果、水野理事の論文も他の応募論文と同じく厳正な審査の上掲載が決定された。

(2) 公募論文の受理の形式について・『西田哲学会年報』次号(第十五号)より論文応募の手段を電子メールとすることが田中久文編集委員長から報告された。

(3) 『西田哲学会年報』電子化について・下記の点についてさらに議論することとして継続審議案件となった。(1) 電子化の作業主体をどのように整えるか。(2) 十五号から早速「STAGE」への掲載を実施するか。また、申請から掲載まで時間がかかると聞いているので早急に作業を開始する必要があるのではないか。(3) 紙媒体を維持すべきか。その場合電子媒体

との掲載タイミングをどのように調整すべきか。(4) 論文執筆について「倫理規定」等を作成し、不正行為等に対する対策を講じる必要があるのではないかと。

(4) 『西田哲学会会報』について・田中久文編集委員長から『会報』の記事執筆の依頼が、出席の理事と幹事に對してなされた。

●その他

(1) 第十五回大会の研究発表の部会が三つとなった経緯について幹事会から以下の報告があった。研究発表への応募数が少ないことを心配して早めに諸方への呼びかけを行った結果、締切期日までに十一名の応募があった。これを承けて幹事会では、発表を不可とする権限は幹事会に委託されているが最終的な決定には各理事の承認が必要であることを確認し、次いで、今大会の会場施設の諸能力を踏まえて見積もれば、三部会を設定すれば十一名全員の発表が可能であり、かつ『善

の研究』講読との共存も可能であることを確認した。以上のことから三部会を設け、応募者全員に研究発表の機会を提供することとした。

(文責・水野友晴)

「西田哲学研究基金」について

二〇一六年度、第十二回の西田哲学研究基金公募には一件の応募があり、厳正な審査の結果、以下の翻訳出版事業に三十八万円を交付することになりました。

Jacynthe Tremblay 氏

『一般者の自覚的体系』フランス語訳出版

今年度も引き続き、交付基金を公募します。一件につき三〇万円から五〇万円、数件の採択を予定しています。西田哲学に関係するテーマ研究のほか、翻訳出版、研究のためのプロジェクトも応募の対象になります。過去に不採択になった場合でも、内容を整えて再申請することは可能です。応募要領は以下の通りです。

(i) 提出書類

①履歴書、②研究計画(八百字程度)、③翻訳出版の場合は出版社との契約書。

(ii) 提出先

原則として次の宛先に電子メール添付でお願いします。

akitomi@kitac.jp

(郵送の場合は、

〒六〇六一八五八五

京都市左京区松ヶ崎

橋上町一

京都工芸繊維大学

秋富克哉研究室)

(iii) 締め切り

二〇一八年三月三十一日(土)

必着。

(iv) 備考

① ほぼ二年以内という目処で、研究成果報告を提出していただきます。

② 翻訳出版の場合は、訳稿完成を前提に出版社との契約がなされることが通常なので、ほぼ一年以内に出版図書の見本を提出していただきます。助成金は出版社に渡されます。助成金交付の際には、出版書籍に本西田研究基金からの助成を受け

た旨を印刷記載してください。また出版図書二冊を本基金に寄贈して頂きます。

③ 研究成果の提出は、刊行物のコピー、抜き刷り、あるいは四千字程度の報告文書のいずれか、とします。提出先は、上記の秋富研究室です。

(文責・西田哲学研究基金運営委員会二〇一七年度代表・板橋勇仁)

西田哲学研究会のご案内

・西田哲学研究会「於京都」

西田哲学研究会では、オープン参加のもと、ほぼ三ヶ月に一回のペースで西田の著作を読みながら討論を行っています。『善の研究』を十回かけて読み終え、続いて『自覚に於ける直観と反省』、『意識の問題』、『芸術と道徳』の主要箇所をそれぞれ数回取り上げました。その後『働くものから見るものへ』の主要論文を扱い、つい先日、前期の雄編「場所」を四回かけて読み終えました。今後も、焦らず急がず、じっくり読み進めていく予

定です。連絡先は左記です。

幹事・秋富克哉 (akitomi@kitac.jp)

案内は、原則としてメールで行ないますので、参加ご希望の方は、このアドレスまでふってご連絡下さい。お問い合わせ等もお待ちしております。

(文責・秋富克哉)

『西田哲学会年報』掲載論文の公募について

『年報』巻末の応募要領にしたがってご投稿ください。たくさんの方の応募をお待ちしております。

す。なお次の第十五号掲載分は、編集の都合上、平成二十九(二〇一七)年十二月末をもって一つの区切りといたしますので、ご了承ください。

「年次大会」における口頭発表の応募について

第十六回年次大会(平成三十年七月開催)の口頭発表者(日本語または英語)を公募します。発表希望者は、来年三月末までに、八〇〇字程度の要旨と簡単な経歴・業績表を添えて事務局にお申込ください。

編集後記

今年度の年次大会には、例年になく多くの発表希望があり状況を呈しました。最近、減少傾向が続いていたので安心です。『年報』にも多くの応募があることを期待しております。

エッセイでは名和達宣会員に、最近の真宗における往生

論争を西田哲学との関係のなかで読み解いて頂きました。また喜多源典会員には、故杉本耕一会員の追悼シンポジウムの報告をして頂きました。西田研究の若手の中心であった氏の急逝には、いくら惜しんでも余りありますが、改めて哀悼の意を表したいと思います。

(編集委員長 田中久文)